

# 妙な塩梅

あん

ばい

えのきど  
いちろう



中公文庫



中公文庫

みよう あんばい  
妙な塩梅

定価はカバーに表示してあります。

1997年2月3日印刷

1997年2月18日発行

著者 えのきどいちろう

発行者 嶋中鵬二

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34

TEL 03-3563-1431(販売部)

03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA, INC. / Ichiro Enokido

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202801-9 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

妙 な あん 塩 ばい 梅

えのきどいちろう



中央公論社



## 目次

|                                        |    |
|----------------------------------------|----|
| 通学と引力                                  | 9  |
| 屋上男                                    | 15 |
| 職業と人生                                  | 21 |
| ひとつの例                                  | 27 |
| どうかと思う                                 | 33 |
| 相撲の困難                                  | 39 |
| とんでもないです                               | 45 |
| 机の引き出しにもうガス切れになってしまった<br>百円ライターを保管すること | 51 |
| ゴルフ練習場の隣人                              | 57 |
| おわびと訂正                                 | 63 |

人間と店 70

第1人生と第2の人生 76

人数分の誘惑 82

婦 京 88

受注と先輩と後輩 94

有力と抜群と駄目 100

倍音と身体 106

人間と冬 112

救急車を呼ぶと救急車は来る 118

狩人と見張り 124

簡便性のある袱紗ふくさ 130

竹馬と桂馬 136

静止の実際 142

とまどうメドゥーサ

148

珍名買い

154

そういう風に書いてくれと頼まれた話

160

軟式と本式

166

金銭と感覚

172

俺は今、何をやってるのだろう

178

夢と睡眠

184

冒険と旅行

190

贋作の天才

196

音痴の歌姫

202

梅雨

208

人間と乳

214

釧路

220

あとがき

226

文庫版あとがき

228

解説

南伸坊

231



妙  
な  
塩あんばい  
梅



## 通学と引力

小学校の頃を思い出すと何故だかうつむいて通学していたように思える。地面のこ  
とや、小さなドブにびっしり生えた藻が綺麗な模様をつくっていたのばかりが連想さ  
れる。ドブをまたいで片足は向こう、片足はこっちという風になって歩いていった。棒  
きれを拾うとブロック塀や板塀に先を押し当てて音をさせた。一番、面白い音が鳴る  
のは鉄の門扉や手すりの柱である。ガラガランと派手な音がした。

腕組みをしながら登校する癖が出来て、変なので直したいのだが、気がつくと又、  
腕組みをしてしまって困ったことがあった。呼吸の調子に変な癖が出来たこともあっ  
た。2回続けて吸い、2回続けて吐くのだった。気にしないでいると1週間ぐらい続  
いて直る。よくわからない単調なメロディにとらわれて、歩いてる間じゅう、そのメ  
ロディを反復するようなこともあった。

子供の頃は自由で何でも出来たという言い方をするが、僕は不自由だった。自分が少しも思った通りにならず、意識の範囲も狭くて窮屈だった。自分が他の子と比べてひどくいびつに出来てるのではないかという不安もあった。深くは考えない。深くは考えないから、しばらくすると忘れて直ってしまうのだが、全体としてそういうことであつた。意識が変に自分に集中していた。

夏休みの登校日や9月の始業式の日は特に不安なのだつた。どういうわけか、登校する途中、他の生徒をひとりも見かけないのだ。これでこいう風歩いて学校に着いて誰もいなかったらどうしたらいいんだろうと思ひながら歩いてゐた。今日が登校日だと思つてゐるのは自分だけで、実際は明日なのだ。今、考えれば仮にそのくらいのこと間違えたとしても、何の予定もない夏休みの一日なのだ、大したことないとか笑つて済ませればよいようなものだと思うが、そのときは大變な恥辱になると考へてゐた。いよいよ学校が近づいてきて誰にも逢わないと、コースを変えて忠霊塔の野球場とか遊び場の方へ逸<sup>ユ</sup>れてしまおうかとも思つた。

当時は学校へ行くというのを大變神聖なことのよゝに感じてゐたから、コースを逸れてそのまま遊びに行つてしまふなどといったら無軌道というか、有人ロケットが宇

宙のどこかわからないところへ飛んでいってしまうような重大なことであった。だが、大抵必ず学校のすぐ近くで登校してきた他の生徒を見かけ、間違いではなかったと知ってホッとするのだ。

学校というところは不思議な引力が作用している場所だった。どう考えてもわがままな子供が、あそこに黙ってじっとしてるのが合点がいかない。放っておくとすぐ色んなところへ飛んでいってしまうのが子供ではないか。そういうことを思い返したときも僕は意識の狭さについて考える。理科委員になったときなどに、先生に理科室の様子を見てこいとか何とか言われて、カギを持ってひとりで教室を出ていったことがあるのだが、廊下を歩いているうち尻のこそばゆいような妙な感じになった。他の生徒は皆、教室にいて僕ひとり自由なのだ。これでいいのかという感じた。自分だけ特別なのだという嬉しさと教室の引力から離れてひとりで行動している高ぶりである。理科室のカギを開け、人体模型や実験用具を見る。そのときもここにずっといて、帰らなかったらどうかと考えた。他の生徒が探しに来るだろうか。先生が来て叱られるのだろうか。物陰に隠れてしまっていたらどうか。誰にも見つからずとここにいたら。どうも僕は子供の頃、うまく隠れれば誰にも見つからずに隠れ通せるのではな

いかと考えていて、色んな場所で隠れるところを探した。昼休みのぼかぼか暖かい図書室で誰にも見つからずに寝てしまうのを空想したり、非常階段の上の方でこのままじっとしていようかと考えたりした。家の押入れの上の段に屋根裏へ抜けるフタがあるのを発見したときは狂喜した。屋根裏や非常階段のおどり場や図書室の隅でじっとしていると、このままふっと自分が消えてなくなってしまうのではないだろうかとか、他の人が僕のことを忘れてしまうのじゃないかという風なことが次々に頭に浮んだ。そう思うと怖くなってそこからみんなのところへ出ていくのだ。無人の理科室も怖いところだった。物陰に隠れて誰にも見つからず、ずっとここにいたらどうだろうと考えたとき、案外、学校にはそういう子が何人もいるのではないかという感じがしたのだ。その子は気配を殺して僕のことを見ている。ずっと何年もそこにいるのだ。

僕は小走りに教室へ戻っていた。

引力といえましょうということもしてみた。昼休みにひとりで校門のところへ行き、外へ出てみたのだ。校門の外には町の景色があった。外は町なのだ。隔てるものは何もない。そのまま歩いてゆけば僕は学校から離れる。学校と関係がなくなつて町のなかをずっと歩いてゆくのだ。足には歩く力があつて、そのくらいは簡単なことだ。校門

のところ立って随分考えてみた。やってみたらどうなるだろう。

一歩出てみた。外だ。町だ。景色が何も見えない。胸がどきどきした。二歩出てみた。二歩も離れた。三步。四歩。うつむいた。誰かが見ているかも知れないと思った。振り返れない。五歩、六歩、七歩、八歩。九歩。十歩。尻の穴が又、こそばゆくなった。十歩だ。十歩で全然動けなくなった。引力ということを考えて、ゆっくり歩いたからここで動けなくなったと思った。全速力で駆けてたら引力を振り切ってもっと遠くまで行ってこれたかも知れないと思った。胸が本当にどきどきしていたが、何ともなかった。学校から十歩も離れたのに何ともないのが不思議だった。もうこれでいいやと思い、校門のなかに駆け戻った。もし、あのままずっと歩いていたらもう戻ってこれなくなるのだと感じた。

僕はそのことを誰にも話さなかった。

学校が何らかの引力を働かせているとしたら、それに抗していることになる行動に遅刻がある。子供の自然性というか、枠から逸脱していく無意識のベクトルが遅刻には作用していると思える。一度、イラストレーターのナンシー関と話しているとき、彼女の通った青森県の小学校には遅刻の反対の概念である「早過ぎ登校」という規則

があり、「早過ぎ」3回は遅刻1回に匹敵する扱いだったと聞いて驚いた。これは物凄く不安な規則である。パラシュートで決った点にぴたりと着地しなくてはならない。前へも後ろへもずれてはならないのだ。子供は時間を守らないというか、ちようどいいというのが出来ないということで、でたらめに早く登校してしまうのを戒めたらしい。「早過ぎ登校」は学校の引力に抗していることになるのだろうか、引力に物凄く引っぱられた結果だろうか。「早過ぎ」の傾向のある子がどんどんその傾向を強めていけば、ついには夜中の3時とか、そういうことになってしまうだろう。そこは学校だろうか。



## 屋上男

やたらと屋上へあがる。原稿の書き出しがうまくいかず、むしゃくしゃしているようなとき。徹夜で仕上げて煙草を吸おうかというとき。何もすることがなく、馬鹿みたいなとき。屋上へあがる。ペンシル・ビルの屋上はガランとしていて何にもない。屋上から見渡す。雑多なビルと屋根の光景。

夜明けならば空を眺める。渋谷、東邦生命ビルの上空が白み、カラスが飛び、爽快である。誰にも内緒の、壮大な映画をひとり特等席で見ている気分になる。空というものが、普段はどうも忘れてしまっているが、ビルや屋根の上方にあるだけじゃなく、自分の真上にもあるのだ。首を反<sup>そ</sup>り返らせて真上を見ると東西南北全方向に空がひろがり、自分がその真<sup>ただなか</sup>っ只中<sup>ただなか</sup>にいることがわかる。遠く雲が行く。身体<sup>からだ</sup>のなかからむくむくと何かが湧いてきて、大声のひとつも出したい感じになる。そうはいっても徹夜